

丹波綾中廃寺の創建年代

小山 雅人

I. はじめに

京都府綾部市青野町・綾中町においては、13年来両町に所在する5遺跡の総計18次に及ぶ発掘調査が行われ、府下有数の遺跡密集地として知られている。とりわけ、7世紀を中心とする遺構群と豊富な出土遺物は、律令体制形成期における一地方の様相をうかがわせる好資料を提供している。「青野・綾中遺跡群」として呼び慣わされているのは、北から青野集落遺跡、青野南集落・官衙遺跡、綾中集落遺跡、及び綾中廃寺跡である(第1図)^(注1)。

本稿は、これらの遺跡から出土した須恵器・土師器の編年案を基に、専ら年代論に的を絞って、青野・綾中遺跡群の諸遺構の位置づけと、綾中廃寺の創建瓦の年代決定を試みようとするものである。

II. 7世紀の土器編年

筆者は以前、綾中廃寺跡第2次調査において検出されたSK8004の資料を基に、須恵器と土師器の杯類を中心として「綾中Ⅰ～Ⅳ型式の設定」を試みたが^(注2)、その後、当該時期の資料は、相次ぐ発掘調査によって増加の一途をたどり、また、学界においては注目すべき発掘調査や論考の発表が行われ、再三、私案の再検討の機会があったので、ここでその結果を提示しておきたい。尚、出発点となったSK8004も現在は青野南遺跡に属する遺構とされ、また追加資料の多くは同遺跡から出土したものであるが、基本的な見方は変わっていないという身勝手な理由から、「綾中」の名称はそのまま残すが、「Ⅰ～Ⅳ型式」を「Ⅰ～Ⅳ期」と訂正しておきたい。

A 須恵器蓋杯の編年——先に触れた旧綾中編年試案は、大略『陶邑』の編年案^(注3)に基づいて、Ⅲ型式第1段階～第3段階及びⅣ型式第1段階(以下「Ⅲ-1」等と略す)を、上記SK8004の各層出土土器と比較し、これを層位的検証に耐えるものとして、同時に畿内の生産地における編年が当地方の土器変遷にも通じるものとして、綾中Ⅰ～Ⅳ型式を設定したものである。しかし、その後の一括資料の増加によって、綾中Ⅰ以前の時期の設定と綾中ⅠとⅡを各々2小期に細分することが可能となった(第2図参照)。

綾中0期は、陶邑Ⅱ-5段階に相当し、蓋杯C₂(以下土器型式名は第2図参照)は古墳時

192

代以来の身と蓋が逆転する前で、しかも法量が倭小化していない時期である。この時期の明確な遺構は現在まだ数少ないが、青野・青野南両遺跡の包含層や堅穴式住居埋土にこの時期の土器が見られることから、今後この時期の遺構の検出が充分期待できよう。

綾中Ⅰ期は、杯A₁の出現によって画される陶邑Ⅲ-1に相当する時期であるが、前段階のⅡ-6の杯C₁が共伴するⅠa期と、杯A₁のみになるⅠb期に細分できる。Ⅰa期の標式は青野南SK8209^(注4)で、Ⅰb期の標式は青野南SK8207^(注5)と堅穴住居跡SB8113^(注6)である。尚、綾中Ⅰ期とⅠ期の間には、蓋杯C₁が単独で存在する時期が想定できるが、現在までに当地では検出されていない。

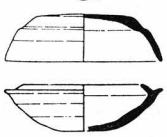
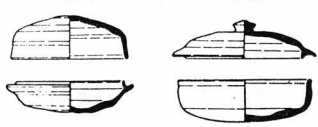
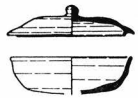
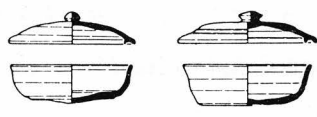
綾中Ⅱ期には、杯A₂が出現する。法量は杯A₁より大きくなり、蓋のツマミは大きく扁平な擬宝珠様になり、天井部は低く平らで、返りが接地することはない。また、杯身も身としてより安定した形態となる。綾中廃寺第2次SK8004のB層とF層^(注7)がそれぞれⅡa期とⅡb期の標式資料である。前半のⅡa期には、まだ前代の杯A₁が優勢で、後半のⅡb期にもかなり残る。杯A₁が当地域で圧倒的に多いのは、長期間使用されたからと思われる。また、大口径の蓋A₃と高台付の身Bが現われるのもⅡ期の後半らしい。

綾中Ⅲ期は、陶邑Ⅲ-3に対応する時期で、杯蓋の返りが退化し、口縁部内面を巡る一条の突線に過ぎなくなる。土器の大きさも前段階に出現したA₃を引継いで大型が主流で、これは綾中Ⅳ期以降も同様である。上記SK8004のG層と綾中SB8107^(注8)がこの時期の標式資料である。

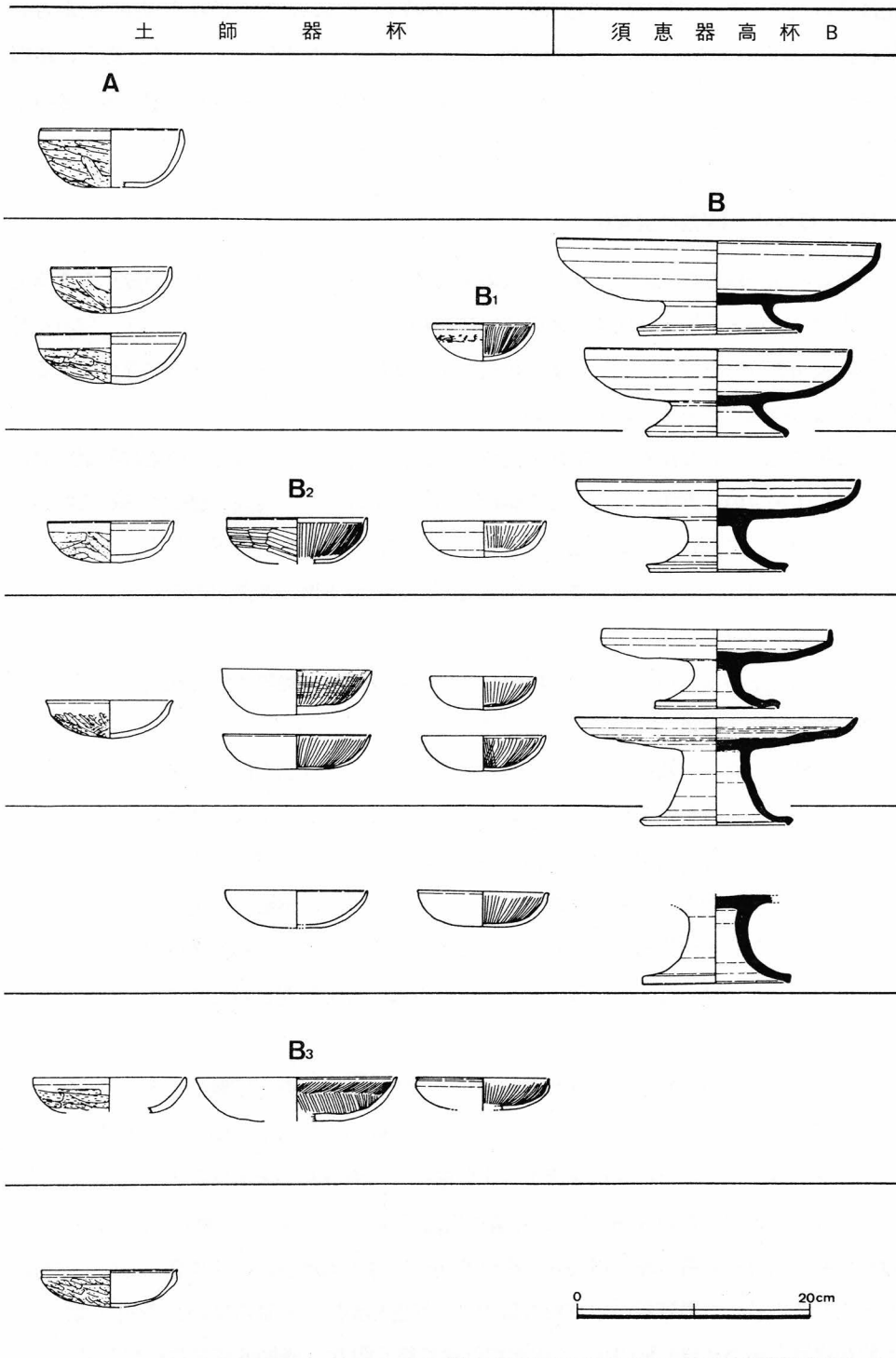
綾中Ⅳ期には、杯蓋内面の返りがなくなり、ツマミも更に扁平になる。陶邑のⅣ-1に対応する時期であるが、報告されているⅢ-3とⅣ-1の併存時期の資料は、青野・綾中では検出されていない。綾中Ⅳ期の標式資料は、綾中廃寺SD8001〔西大溝〕^(注9)と綾中SB8106^(注10)であるが、この時期の資料は当地では比較的少ない。

B 土師器杯の編年——当該時期の土師器については、さほど形態変化が見られず、須恵器の編年に従属せざるを得ないが、杯に関してはその径高指数が編年の有効な手段とされた。そして、青野・綾中の出土資料について検証してみた結果は、飛鳥地方におけるそれと矛盾しないことが確認された^(注11)。即ち、須恵器による綾中編年試案の各時期における土師器杯の径高指数の平均値は、Ⅰ期：41、Ⅱ期：32、Ⅲ・Ⅳ期：22である。これは、内面に暗文のある杯Bのみならず、暗文を施さず、外面をケズリで仕上げる杯Aについても有効である。ただし、多数の個体を得られた場合、中には平均値からやや外れた値を示す土器もあり、混入と見做すか、個体差と見るか問題である。言い換えれば、厳密なものではないが、かなり有効な目安にはできるであろう。

C 須恵器・土師器の他の器種——杯以外の器種については数も少なく、顕著な型式変

時 期	標 式	須 恵 器 蓋 杯
綾 中 O	青野南 SB8101	C₂ 
綾 中 I	a 青野南 SK8209	C₁ A₁ 
	b 青野南 SK8208 SK8207 SB8113	
綾 中 II	a 綾中廃寺 SK8004 B層	A₂ 
	b 綾中廃寺 SK8004 F層	A₃ 
綾 中 III	綾中廃寺 SK8004 G層 綾中 SB8107	
綾 中 IV	綾中廃寺 SD8001 綾中 SB8106	B₄ B₂ 

第2図 綾 中 土



化は見られないようである。とは言え、当地の特徴的な器種である須恵器高杯B(あるいは脚付盤)の変遷には、おぼろげに形態の変化が伴うように見える(第2図)。即ち、杯部が盤状の深いものから皿状の浅いものへ、同時に脚部の太く短いものから細く高いものへの変化である。

III. 綾中0～IV期の実年代

綾部という一地方の土器の実年代を求めるには、どうしても、文献史料の援用を期待できる畿内の宮都・寺院・瓦陶兼業窯の資料に頼らねばならない。そこで、一地方である当地での後述するような若干の型式変化の遅れを念頭に置きながら、畿内中枢部における7世紀の土器の実年代をまとめてみたい。

1982年に発表された白石^(注13)太一郎氏の論考は、畿内で行われている従来の諸編年案における絶対年代決定の「方法ならびにその結論について少なからぬ疑問を感じざるをえない」ことから出発して、特に、7世紀前半と考えられていた土器を若干下げた実年代観を提示されている。以下、この批判を踏まえた上で、7世紀の土器の各段階の実年代を示していると思われるデータを列挙する。

(1) 飛鳥寺下層出土の杯^(注14)(陶邑Ⅱ-3か)は、同寺建立開始(588年)に先行する。白石氏は、その年に近い6世紀末葉のものと示唆している。

(2) 幡枝窯の資料を基に、いわゆる高句麗式とされる軒丸瓦と陶邑Ⅱ-6～Ⅲ-1の須恵器を7世紀初頭のものとする従来の説に対して、白石氏は、この型式の軒丸瓦を出土する豊浦寺の創建年代を舒明朝頃と見る福山敏男氏の説を採り、上記須恵器も7世紀の第2四半期^(注15)に中心を置いて考えるべきであろうとされた。更に近年、宇治市隼上り瓦窯で豊浦寺創建瓦を生産した事実が知られ、これらの瓦に伴う須恵器が陶邑Ⅱ-5後半(飛鳥Ⅰ)に属することが判明した。^(注16)従って、先の福山説を採るならば、舒明朝期と陶邑Ⅱ-5とが接点を持つことになる。

(3) 孝徳朝の長柄豊碕宮と見られる前期難波宮の整地層とその下層出土土器は、陶邑Ⅱ-5～Ⅱ-6であり、Ⅲ-1の土器は、下層と朝堂院東回廊中央柱掘形内から極く少量出土しているに過ぎないことから、孝徳朝前半の土器は、まだ陶邑Ⅱ-6を主体とすると考えられる。^(注17)

(4) 『日本書紀』斉明6(660)年5月条に見える漏刻と推定される飛鳥水落遺跡の礎石建物の基壇化粧石組溝の堆積層から、陶邑Ⅱ-6～Ⅲ-1の須恵器と、飛鳥Ⅱ～Ⅲの土師器杯^(注18)が出土している。この資料の中で最も新相の土師器杯が属する飛鳥Ⅲ(大略綾中Ⅱ期)の標式的な須恵器杯A₂(陶邑Ⅲ-2)は、上記の推定に従う限り、斉明6年には出現していた筈であるが、前段階のC₁やA₁の須恵器杯もまだ使用されていたことを示しているようであ

る。

(5) 大津市穴太瓦窯から出土した須恵器は、担当者の報告によれば、焼成された瓦類(大津京時代)と同時期のものと判断される好資料である。白石氏はこの資料を陶邑Ⅲ-3と見ておられるが、報告のようにⅢ-2であり、これは大津京廃絶の672年までに存在した須恵器と見做してもよからう。^(注19)

(6) 飛鳥Ⅳ(陶邑Ⅲ-3)が7世紀第4四半期、飛鳥Ⅴ(陶邑Ⅳ-1)が藤原京時代にそれぞれ相当することは、飛鳥京や飛鳥藤原宮の調査結果から見ても、ほぼ異論のないところであろう。また、陶邑Ⅲ-3とⅣ-1の間には、生産地においても消費地においても、併行期間があったと見るべきであろう。

(7) 『陶邑』では、型式ないし段階の存続年月が推定されているが、それによると、Ⅱ-4が30年前後、Ⅱ-5が10年前後、Ⅱ-6が10年前後、Ⅲ-1が15年以内、Ⅲ-2が20年以内、Ⅲ-3が20年以内、Ⅳ-1が30年以内という。どのようにして出された数値か詳かではないが、^(注20)上記した諸データと矛盾していないので、次に述べる編年案において目安とした。

以上を基に作成したのが第1表で「陶邑試案」とした実年代案である。奈良国立文化財研究所の飛鳥Ⅰ～Ⅴ、及び橿原考古学研究所の飛鳥京Ⅰ～Ⅵの両編年案との比較も試みた。^(注21)また、各々の編年単位の中に標式とされている土器型式を陶邑のⅡ-4～Ⅳ-1の略号によって示した。

尚、八幡市平野山瓦窯の四天王寺創建瓦に共伴するとされる須恵器の年代は、630年代をさかのぼり得ないと考える。また、豊浦寺の創建瓦を生産した隼上り瓦窯での須恵器との共伴関係は、先の白石氏のやや間接的な論証を補強するのみならず、直接的に豊浦寺の創建年代を先の福山氏の文献学からの舒明朝建立説に一致させる資料であると評価できるのである。^(注22)

さて、本題の綾中0～Ⅳ期の実年代であるが、原則として当地の土器の変遷が畿内のそれと同様の変化をたどっているので、畿内とはほぼ併行するものと考えている。第1表で「綾中」として示した年代幅がそれである。畿内のⅡ-6とⅢ-1、及びⅢ-3とⅣ-1が共存する2つの時期については、当地では明確な資料が得られていないので、現在のところ、各々綾中0期及び綾中Ⅲ期に含め、前代の土器のセットが畿内からの新型式をまだ含まない段階と考え、これを畿内に対する綾部地方の遅れと見做しておきたい。

IV. 青野・綾中地区の7世紀遺構群の年代

当地区では、南北1km・東西0.6kmに及ぶ青野・青野南・綾中の各遺跡で、7世紀の遺構として現在までに60棟以上の竪穴式住居跡が検出されており、特に青野南遺跡では、

表1 7世紀の土器編年対照表

年代	天皇	奈文研	白石	榎考研	陶器試案	綾中	青野南	青野	(参考)
590	崇峻		飛鳥寺 下層		II-3			(包)	飛鳥寺
600		推			II-4			含	
610		飛鳥 I (II-5) (III-1)	a (II-5)	飛鳥京 I (II-5)				層	
620	古							土	
630	舒	飛鳥 II (II-6) (III-1)	b (II-6)	飛鳥京 II (II-6)	II-5 ↑ T K209 ↓ T K217	綾中 O	建物 C 群	器	集上り 窯跡
640	明				II-6			第1 段階	平野山 窯跡
650	皇極		c (III-1) d (III-2)	飛鳥京 III (III-1)	III-1	綾中 I	a D 群 b	2	I
660	孝德	飛鳥 III (III-2)		飛鳥京 IV (III-2)	III-2	綾中 II	a A 群 b	3	III
670	天智		e (III-3)	飛鳥京 V (III-3) IV-1	III-3	綾中 III		4	期
680	天武	飛鳥 IV (III-3)					B 群	式	水落遺跡
690	持統							住	穴太瓦窯
700	文武	飛鳥 V (IV-1)		飛鳥京 VI (IV-1)	IV-1	綾中 IV		居	
710								跡	
								群	↑ 藤原宮 ↓

掘形の規模が1辺1m前後の柱穴をもつ大型掘立柱建物跡も9棟、柵列を5列数えている。
 その性格等については本稿では触れ得ないが、それらの遺構の年代を探ってみたい。^(注23)

これらの遺構群の中で、最も古く位置づけられるのは、青野遺跡と青野南遺跡のいくつかの竪穴式住居跡で、綾中0期である。青野遺跡の包含層や住居跡の埋土からは、より古い須恵器(陶器Ⅱ-3～Ⅱ-4)が出土しているので、当時の由良川の北岸にあった青野遺跡の方が、南岸の青野南遺跡よりも集落は早く始まっていたのかも知れない。^(注24) 推古朝から舒明朝にかけての頃であつたろう。竪穴式住居群が綾中遺跡にまで及ぶのは、現段階では綾中I期である。

青野・綾中地区で、綾中廃寺と共に最も目を引く遺跡である青野南遺跡の大型掘立柱建物跡と柵列は、建物の軸の方位によってA～Dの4群に分かれ、切り合い関係等からC>D>A>Bの相対的新旧関係が報告されているが、ここで、前2節において提示した綾中編年試案に基づいて、各群の絶対年代を求めてみよう。^(注25)

(1) C群の建物SB8208の柱穴は、綾中Ia期の土器群が出土した土坑SK8209によって切られている。従って、C群建物群はこの土坑と同時期か綾中0期にさかのぼる筈である。

(2) C・D・A各群の建物が重複する67K15(S)トレンチにおいては、包含層の土器が(平安時代の土器を別にして)綾中Iaから、下ってもⅡaまでに限られることから、D群・A群建物も綾中Ⅱa期までという可能性が高い。また、D群のSB8210とA群のSB8211は、建物自体及び西方へ伸びる柵列(?)がよく似た柱穴の配置を見せており、ほぼ同位置での建て替えと思われるが、これらと5m程北に重なって掘られた土坑SK8207・8208(綾中Ib期)及びSK8209(綾中Ia期)とは無関係と思われる。^(注26)

(3) 青野南遺跡の中核部における竪穴式住居は、綾中I期を最盛期としているが、綾中Ⅱa期のSB8201を最後に廃絶し、替って建てられたのがA群の建物跡であり、上述の(2)の点を考え合わせると、A群建物の出現を綾中Ⅱa期に位置づけても無理はなからう。

(4) B群の建物と柵列は、最も大規模で、検出例も圧倒的に多い(B群4棟、A群3棟、C群・D群各1棟、柵列は全てB群)。SB8108の柱穴掘形に綾中Ⅱ期の土器が入っていたこと、B群建物の柱穴内に綾中Ⅳ期の遺物が見られないこと、包含層中にも8世紀に下る遺物が極端に少なくなること等から、およそ綾中Ⅲ期前後にB群建物群を位置づけておきたい。^(注27)

以上をまとめると、最初的大型建物(C群)が舒明朝に建てられ、孝徳朝前後にD群に建て替えられたらしい。この両期間には、やや南に竪穴式住居群も並存していたと考えられる。次いで、斉明朝から天智初年頃にかけて、その竪穴式住居群も廃絶され、より広い範囲にA群建物群が建てられたことがうかがわれる。そして最後に、更に大規模なB群の建

物と柵列が青野南遺跡の中枢部に建ち並んだのが天武朝の頃であつたろう。

一方、南の綾中地区では、地区の北西にあたる小字花ノ木西半に10棟の竪穴式住居跡と4棟の掘立柱建物跡(内2棟は倉庫)が検出されており〔綾中遺跡〕、少なくとも3グループ(家族?)が、綾中Ⅰ期からⅣ期までの間に2～3度の建て替えを行いつつ、居住していたようである。^(注28)

綾中地区の中心は、しかし、言うまでもなく綾中廃寺である。この古代寺院については、昭和8年に初めてその存在が夥しい布目瓦の散布によって確認されて以来、表採資料も次第に増え、郷土史家に言及されることも再三であつた。^(注29)昭和55年度に始まる3度の発掘調査によって、多くの資料が得られたとは言え、中心伽藍については全く未確認である。この寺院が、上述した青野・綾中地区の変遷の中で、どの時期に位置づけられるのか、瓦と土器からその創建年代を探ってみたい。

V. 綾中廃寺の創建瓦

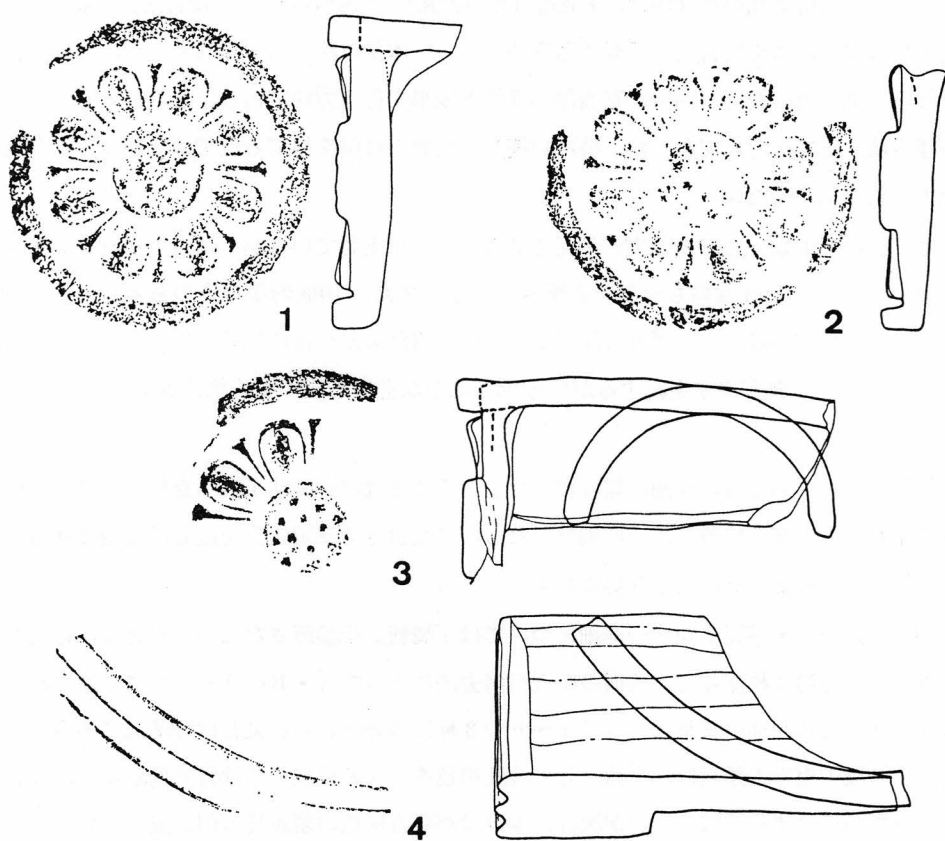
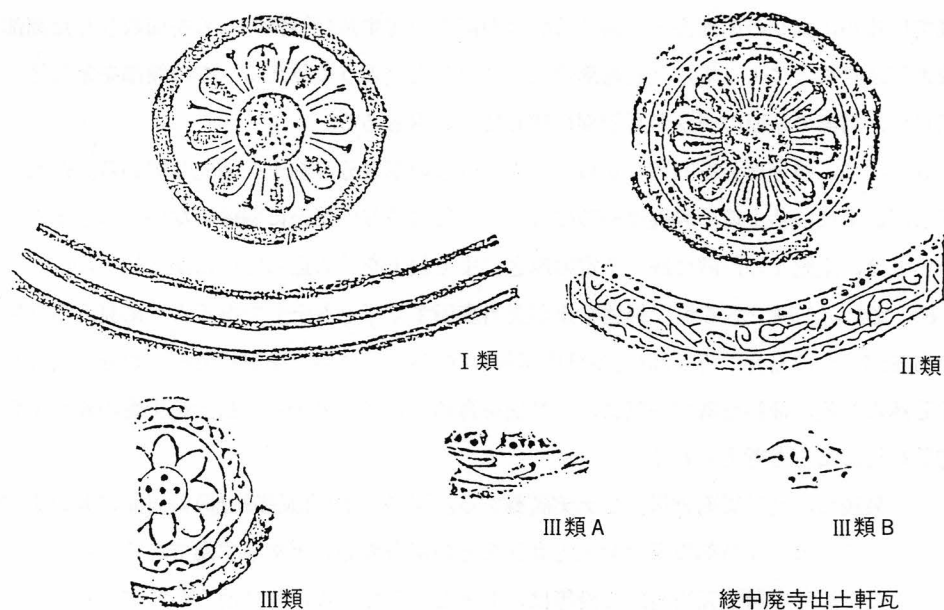
3次に亘る発掘調査によって、綾中廃寺の推定寺域とその周辺から、軒丸瓦3種37点、軒平瓦4種21点、丸瓦・平瓦がコンテナ約200箱分が出土している。ここでは、3型式に分けられる軒瓦の内、創建瓦と考えられる軒丸瓦Ⅰ類・軒平瓦Ⅰ類、及び、胎土や焼成の特徴からこれらの軒瓦に伴うと見られる丸瓦Ⅰ類・平瓦Ⅰ類を中心に、^(注30)概報と重複するが、その後の検討結果も併せ、述べておきたい。

(1) 軒丸瓦Ⅰ類——素文縁素弁八葉蓮華文軒丸瓦である(第3図1～3)。突出したやや大き目の中房に12個の蓮子を2重(4+8)に配し、中央の蓮子がないのが特徴的である。蓮弁は、中房から低く発して次第に高くなり、円型反転式の弁端で最高に達する。蓮弁の周縁に輪郭線をつける。楔形の間弁はやや太めで、中房から発し、蓮弁と同様の起伏を呈する。周縁は直立縁で素文である。28点出土している。

製作技法に関して、最近瓦を再見する機会を得たので、^(注31)その観察結果を報告しておきたい。当初表採品を見た時は、瓦当部と丸瓦部を別個に製作して、少量の補強粘土で接合したように思われたが、発掘調査によって出土した破片20数点を見ると、次のような製作過程が復原できるようである。

a この軒丸瓦は、凹凸に富んでおり、瓦範の押捺は、小粘土塊を範の深いところ、特に中房部分に詰め込んで行く方式が採られたらしく、中房部分の粘土塊が明瞭に見える例や、中房部分のみの破片が見受けられる。上原真人氏の言う「順次詰め込み方式」^(注32)である。

b そして、瓦当厚さの約半分まで詰め込んだところで、用意した生乾きの丸瓦を瓦当周縁の範の溝にはめ込んでいる。この時、溝の中には内区部分と同程度に粘土が詰め込ま



第3図 綾中廃寺の軒瓦（1～4の縮尺1/4）

れているが、丸瓦の広端部と凸面あるいは凹面との成す角(前者が多い)を面取りした筒部を差し込むことによって、丸瓦端部の上下にはみ出たように見える。この筒部を差し込む工程で、筒部の端面の一部が瓦範面に達している例もある。

b 次に、接合部分を固めながら、瓦当の残りの厚さ分の粘土を補充している。ただ、瓦当厚さ半ばの粘土塊の界線は明確ではなく、特に筒部の接合に関係のない瓦当下半部については、上記 a の段階に既に予定の厚さにまで粘土を詰め込んでいたかも知れない。

c' また、1例であるが、補強粘土が瓦当表面まで「とも土」であるように見える破片があるが、この場合、周縁部(と多分中房部)にのみ、先に粘土を詰め込んでおき、筒部を差し込んだ後、最終段階で一気に、瓦当面を含めて瓦当部の殆どの粘土を予定の厚さにまで詰め込んだとも考えられる。

d 最後に、瓦当裏面と周囲をナデ調整する。瓦当上半(丸瓦接続部)の周囲に強いナデが見られるのは、瓦当部周縁の粘土と丸瓦部との接合部分をナデ消す為であろう。なお、瓦範の及ぶ範囲を示す瓦当周囲の段等は、あったとしてもこの時に消えたのであろう。

このような軒丸瓦の接続法は、『飛鳥白鳳の古瓦』^(注33)に述べられた「接着法」「印籠つき法」ではなく、敢えて言えば「嵌め込み法」と「一本作り法」の中間的方法で、一口に言うなら、丸瓦との接合と同時に瓦当部の押捺と成形を行う方法であり、とりあえず「成形時接合法」とでも呼んでおくと、破片の観察に絶対の自信を持てない訳ではないので、今後大方の御教示を得たい。

(2) 軒平瓦Ⅰ類——三重弧文軒平瓦である。9点出土しているが、瓦当上下厚さが5cm前後のものと、3cm強のものとの2種類がある。また、中間的な厚さのものもあり、型式分類はされていない。いずれも深顎であるが、顎部の幅には個体差がある。弧線は型引きで、中央の1条がやや突起するが、断面が正弦状曲線を成す整美な重弧文である(第3図4)。

製作工程については、前回の報告に付け加えることはない。粘土板巻き付け桶巻4枚作りの平瓦に、顎部を接着し、一度調整したものに型引きで三重弧文を施し、最後に瓦当部と瓦当面の境に横ナデによる最終調整をしている。

(3) 丸瓦Ⅰ類・平瓦Ⅰ類——詳細については「概報」を参照されたい。平瓦は、粘土板巻き付けの桶巻4枚作りで、凸面の叩き目消去法によってA・Bの2タイプに分類され、Aタイプは更に凹面の調整によってa～cの3種に細分される。丸瓦は行基式である。

以上の綾中廃寺Ⅰ類瓦は、全体として淡灰褐色を呈する焼成やや軟質の例が多く、これに、橙褐色を呈する軟質のものが次ぎ、少数ながら青灰色の須恵質の例が混っている。しかし、胎土については、いずれも共通して細砂と少量の白色石粒を含み、Ⅱ類その他の瓦

の胎土との識別は、Ⅰ類が凸面の叩き目をナデかケズリで全面消し去るのに対し、Ⅱ類が縄叩き目をそのまま残す事も幸いして、比較的容易である。

(4) 軒瓦Ⅰ類瓦当文様の編年的位置——素文縁素弁八葉蓮華文と三重弧文の組合せについては、「概報」に報告したように、①弁端が円形反転式である点、②素文の周縁が比較的幅広い点、蓮弁に輪郭線を付けている点、④素弁でありながら二重に巡る蓮子を配置している点、⑤型引き重弧文軒平瓦と組合う点等から、素弁後期後半、即ち、天智朝前後に位置づけられ、この点に関して修正の必要はないと考えている。

VI. 綾中麿寺創建瓦の土器との共伴例

綾中麿寺とその周辺の綾中遺跡、及び北隣の青野南遺跡の発掘調査によって、豊富な土器の一括資料が得られ、当地域の7世紀の土器編年に重要な役割りを果していることについては上述したところであるが、これらの資料の中に綾中麿寺の瓦片が混っている例が少なからずあり、今度は層位学的に綾中麿寺創建瓦の年代を探ることにする。

綾中麿寺の瓦を併出した例は、次の通りである。

(1) 綾中麿寺第2次調査で検出された土坑 SK8004 G層は、前述したように綾中編年Ⅲ期の標式資料であるが、Ⅰ類10点、Ⅱ類2点の瓦片が伴っていた。^(注34)

(2) 綾中Ⅱb期の標式とした同じSK8004のF層からは、唯1点ではあるが、Ⅰ類の瓦片が出土した。

(3) 青野南遺跡のB群掘立柱建物のひとつ SB8108の柱穴掘形に綾中Ⅱ期の土器片(須恵器杯蓋 A₂)が見られたことは先にも触れたが(Ⅳ、(4))、同じ建物の別の柱穴掘形からⅠ類の瓦片が出土している。^(注35)

(4) 青野南遺跡の調査範囲のほぼ全域から瓦片の出土が見られるが、包含層の遺物は7世紀の土器が圧倒的であり、瓦片の多くはⅠ類である。^(注36)

(5) 青野南遺跡の竪穴式住居 SB8205は、8世紀の遺構と思われるが、床面に2片に割られた1個体分の丸瓦Ⅰ類があった。^(注37)

以上の事例の中で、(2)に挙げた綾中Ⅱb期の標式遺構におけるⅠ類瓦の共伴は、唯1点という弱点はあるが、当該期には綾中麿寺の創建瓦が既に製作されていたことを証明している。(1)や(3)の例もこれを補強するものである。

VII. 青野南遺跡掘立柱建物群と綾中麿寺の方位

青野南遺跡の4群の掘立柱建物の新古関係及びその実年代についてはⅣで述べた通りであるが、4群に分類される直接の要因である建物の軸方向を見ると、最古のC群のN-18°

-Eから、D群のN-16°-E、A群のN-13°-Eを経て、最も新しいB群のN-4°-Eへと、何故か規則的に反時計回りに磁北に近くなるという変化が見られることが報告されている。^(注38)
 綾中廃寺の方位については、直接寺域ないし中心伽藍に関する遺構が確認されていないので、不明とする外はない。しかしながら、推定寺域周辺の道路や地割の方位がN-8°-E前後であり、発掘調査で確認され、寺域西限とも考えられている西大溝がN-7°-E、そして、^(注39)
 第3次調査の東西溝SD8201(N-78°-W)と直交する南北軸がN-12°-Eを示しEいずれも青野南建物群の変遷のA群とB群の間、即ち綾中編年のⅡa期とⅢ期の間に入る値を示していることは、創建瓦片の最古の共伴土器が綾中Ⅱb期であることと符合するのである。

VIII. 西原窯跡

綾中廃寺のⅠ類瓦は、東南約3.5kmの西原町西原窯跡B窯群4号窯にも見られ、ここで生産され、綾中へ供給されたことが判明している。道路の拡幅工事によって削られた丘陵斜面に露出した灰原で、瓦と共に採取された須恵器の多くは8世紀前半のものであるが、^(注40)
 7世紀中頃と思われる杯身も混っているらしい。B窯群には他に5基の窯体の痕跡が見られるが、今後もし発掘調査が行われるならば、綾中廃寺の創建年代を考えるには、最優先すべき資料を提供することになる。

IX. 綾中廃寺の創建年代

文献史料はおろか、伽藍遺構すら検出されていない綾中廃寺の創建年代を求めて、年代の尺度となる土器編年から始め、創建瓦の瓦当文様、土器との共伴関係、周辺の遺構の方位等の各観点から検討を加えて来たが、いずれもひとつの結論を指し示している。即ち、素弁後期後半に位置づけられる創建瓦は、綾中Ⅱb期の土器との共伴関係から、660年代の天智朝に製作され始め、青野南にA群大型掘立柱建物が建ち並んでいた頃、綾中では寺域や伽藍配置の計画が進んでいたと考えられるのである。西原の瓦窯からは、船で製品が運ばれ、現在よりも300m西を流れていた由良川(第2図)の津に陸揚げされていたことであろう。

(小山雅人=当センター調査課主任調査員)

注1 中村孝行「青野・綾中地区遺跡群の調査」『京都府埋蔵文化財情報』第3号、京都府埋蔵文化財調査研究センター、1982、18～24頁参照。

注2 中村孝行・小山雅人「綾中廃寺跡第1次・第2次発掘調査概報」『綾部市文化財調査報告』第8集、綾部市教育委員会、1981、89～96頁。

注3 中村 浩『陶邑』Ⅱ・Ⅲ、大阪文化財センター、1978。

- 注4 中村孝行「青野南遺跡第3次・第4次発掘調査概報」『綾部市文化財調査報告』第10集，綾部市教育委員会，1983，24，25～40頁。
- 注5 同上文献，22～24，25～40頁。
- 注6 中村孝行「青野南遺跡発掘調査概報」『綾部市文化財調査報告』第9集，綾部市教育委員会，1982，65～66，74～83頁。
- 注7 上掲文献（注2），85～95頁。
- 注8 中村孝行「綾中遺跡発掘調査概報」『綾部市文化財調査報告』第9集，綾部市教育委員会，1982，111～112，118～127頁。
- 注9 上掲文献（注2），82～83頁。
- 注10 上掲文献（注8），110～111，118～127頁。
- 注11 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ，1978，95～96頁。
- 注12 上掲文献（注2），96頁。
- 注13 白石太一郎「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集，国立歴史民俗博物館，1982，79～92頁。
- 注14 奈良国立文化財研究所『飛鳥寺発掘調査報告書』，1958，pl.16，21と7。
- 注15 白石氏上掲論文，88～89頁。
- 注16 杉本 宏『隼上り瓦窯発掘調査概報』（宇治市文化財発掘調査概報 第3集），宇治市教育委員会，1983，52頁。
- 注17 藤田幸夫「難波宮下層遺跡出土の土器について」『難波宮址の研究』第七，大阪市文化財協会，1981，報告篇，181～186頁。
- 注18 奈良国立文化財研究所「飛鳥浄御原宮推定地の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』12，1982，48～55頁。
- 注19 林 博通・葛野泰樹「滋賀県大津市穴太遺跡の瓦窯跡」『考古學雑誌』第64巻第1号，日本考古學會，1978，55～57頁。
- 注20 上掲文献（注3）。
- 注21 藤井利章「土器」『飛鳥京跡』二（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第40冊），奈良県教育委員会，1980，207～317頁。第2図の実年代については315頁参照。
- 注22 奥村清一郎・肥後弘幸・他『平野山瓦窯跡発掘調査概報』，八幡市教育委員会，1985，22～23頁。
- 注23 中村氏上掲論文（注1），及び（注4），47～50頁参照。
- 注24 小山雅人『青野西遺跡』（京都府遺跡調査報告書 第4冊），京都府埋蔵文化財調査研究センター，1985，34，86頁。
- 注25 上掲文献（注4），47～50頁。
- 注26 同上文献，22～24頁参照。
- 注27 上掲文献（注6），90～91頁。
- 注28 上掲文献（注8）。
- 注29 村島 渚『三丹蚕業郷土史』，1933；村上佑二『綾部町史』，1958；梅原三郎「綾中麿寺」『綾部市史』，1976等。杉原和雄「綾中麿寺出土の遺物について」『京都考古』第12号 1975 9～16頁に，瓦・土器・風招の紹介がある。
- 注30 上掲文献（注2），67～81頁。
- 注31 綾部市教育委員会の中村孝行氏の御好意による。尚，同氏には，本稿執筆にあたって最大限の御協力と御助言を賜ったことを記し，感謝の意を表する次第である。
- 注32 上原真人「瓦の見方について」『富山市考古資料館紀要』第3号，富山市考古資料館，1984 15頁。

- 注33 奈良国立博物館編『飛鳥白鳳の古瓦』縮刷版，東京美術，1982，352～354頁。
- 注34 上掲文献（注2），79頁。
- 注35 中村孝行氏の御教示による。上掲文献（注6），85頁参照。
- 注36 注35に同じ。
- 注37 上掲文献（注4），17～18，42～43頁。
- 注38 同上文献，47～50頁。国土座標軸に対してN-6°0'28''-Wを示す調査区画方位を基準とした値である。
- 注39 中村孝行「綾中麿寺跡第3次発掘調査概報」『綾部市文化財調査報告』第10集，綾部市教育委員会，1983，53頁。
- 注40 杉原和雄「京都府北部の須恵器生産について」『丹後郷土資料館報』第2号，京都府立丹後郷土資料館，1981，27～42頁。